View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【論文】

家族の変容における家族レジリエンスを読み解く

－中途障害者家族の系時的聞き取り調査の会話の分析から－

得津　愼子*

The Trial of Analyzing Family Conversation for Clarifying Family Resilience in the Family Transformation through Long-term Family Interviews of a Person with High Brain Disabilities in His Fifties

Shinko Tokutsu

要　旨

筆者は家族にはその困難を乗り越えて、回復し、成長する力を促進する家族レジリエンスという力があるのではないかということについて研究してきたものであるが、本稿では 50 歳代に中途障害者となった男性とその家族への系時的聞き取り調査を紹介する。障害者家族は、地域移行し、一端落ち着いても、加齢のようなチャレンジが待ち受ける長い道のりを歩んで行かねばならない。家族レジリエンスは家族がそのような厳しく長期にわたる困難を乗り越えるために助けとなるものであると考えられる。本稿では、それを立証するために、家族アセスメントの道具として家族療法で使われている家族構造（パワー、連携、境界）とコミュニケーションの変化に着目して、3 回の面接の会話を分析した。研究方法としてより信頼性を高めるために混合研究法を用い、質的データを量的データに変換し、分析する変換型混合デザインを採用した。結果は、家族構造の変化はある程度、家族のコミュニケーションを反映するというものとなった。家族のコミュニケーションの変化は、家族間の交互作用の変化を意味し、家族は変化と安定を繰り返す揺らぎを保つものであり、それを筆者は家族レジリエンスであると想定した。

本研究では、障害を持つ人びととその家族を支える家族レジリエンスの力を認識すること、とかく家族も関わる人々も安定を志向しがちであるが、家族にとって家族周期上も避けがたい変化のためにも、揺らいでは鎮まる家族レジリエンスに着目することの重要さが改めて明らかにされたと思われる。

Abstract

I've been researched about family resilience, which enhance people in difficulties rebound to make growth. In this paper, I'll introduce long-term family interviews in which a family takes care of a person with high brain disabilities in his fifties. Although such people and their families settle down in-home living peacefully after long journey, the next challenges like their ageing are watching for them. Family resilience is the help-

受付日　2016. 9. 23 ／ 受理日　2017. 1. 10
*関西福祉科学大学　社会福祉学部　教授

ing concept for them to survive such severe and long-term adversity. For verifying this, I focus on the transformation of the family structure【power, alliance, boarder】and the communication which are often utilized as the assessment tools of family therapy, and I analyzed their conversation. I adopt the conversion mixed design which try to do the quantitizing qualitative data in order to enhance reliability of this research. As the results, it becomes clear that the family communication, to some extent, reflects the change of the transformation of family structure which means the change of family relationships. And they keep equilibrium between morphogenesis and morphstatics. I assume these movements themselves are family resilience. In this study, it becomes clear that recognizing the strength of family resilience of people with disabilities.

● ● ○ **Key words**　系時的聞き取り調査 long-term interview／家族レジリエンス family resilience／混合研究法 mixed method research／変換型混合デザイン conversion mixed design／コミュニケーション communication

【研究の目的】

本研究は、50代半ばをすぎて高次脳機能障害を受障した中途障害者[1)]の男性の家族との系時的な聞き取り調査から、家族がどのように家族レジリエンスを働かせ、日常生活を営んでいるかを明らかにするものである。家族は、困難や危機に曝されたとき、変化を迫られ、家族システムの様相を変化させて、やがては平穏な日常生活に戻っていく。そのとき働く力が家族レジリエンスといわれるもの（Walsh, F. 1996）[2)]であり、何らかの形で家族に援助的に関わる立場のものにとって、その力を意識しつつ家族に働きかけるという視点は有用である。

『平成25年度版障害者白書』[3)]によれば、身体障害児・者の97.6%は在宅で家族と生活を共にしながら「自立した」地域での暮らしを送っているが、そのうち40歳から65歳の発生率は38.2%である。多くの壮年期以降の人びとが中途障害を受障し、家族とともに地域生活を送っている。さらに身体障害児・者総数の6割は65歳以上であり、何とか地域で安寧な生活を送るに至った中途障害者には、次に高齢化という新たなチャレンジが待ち受けている。しかしながら、地域移行を目指す福祉社会システムは未整備であり、現実的にはケアの主体は配偶者を始めとして家族である。障害者家族は、家族規範からも、社会規範からも、社会の含み資産としても、家族介護をその責任の範疇として担いがちである。一方で、「本人主体」の立場からは、「脱施設」と同時に「脱家族」を求める呼び声も高い。そこに障害者本人と家族や社会のそれぞれがそれぞれに求めるもののズレが象徴的に見えてくる。そこで、一過性の困難や災難ではなく、壮年期のあるときに受障し、その後も非可逆的な障害を抱えた中途障害者とその家族が、長い道のりをともに歩んでいくプロセスに焦点を当て、そこに家族レジリエンスがどのように働いているかを明らかにすることには意義があると考えた。

中途障害者と言っても、その原因・障害の実際・年齢・家族背景や生活状況は一様に捉えられるものではなく、生活の中から立ち上がる回復のプロセスにおける困難とニーズとその対処を鮮明にするためには個別性を捨象しない質的研究、それもプロセスを共に経験しうる系時的聞き取り調査が適切であると考えた。その分析には、システム論に基づく家族療法[4)]で用いられる家族の全体像を把握して仮説を生成するためのいわゆる家族アセスメントの手がかりを用い、そこで明らかになったと考えられることを検証するために、統計的な検証も必要なのではないかと考え、混合研究法（Mixed Method Research）の中でも、質的データを量的データに変換して分析する変換型混合デザイン（クレスウェルとクラブトリー　2016：5）[5)]と言われる方法を採用し、聞き取り調査の実証的研究の可能性を探ることも本研究の課題とした。

【研究の方法】

1．調査の概要

（1）調査参加者と調査方法

「何らかの困難に出会って、そこから回復している家族のお話をうかがいたい」ということで、社会福祉専門職に依頼し、中途障害受障後バリアフリーに新築した自宅で地域生活を送っている受障後1年目のAさん家族への聞き取り調査を行い、7年間に計3回の調査を行った。家族はAさん（受障時57歳）、妻Bさん（57歳、専業主婦）、長男Cさん（20歳、大学2回生）の家族3人であった。調査には、紹介者であり受障時の担当専門職であったDさんがフォローアップの意味も含めて同席した。聞き取り調査者は筆者であった。

（2）インタビューの方法

調査の面接とセラピーでの面接は異なる枠組みで異なる目的のものであるが、家族療法においては、何気ない会話も鴨の水面下での水掻きのように入念に組み立てられており、調査における家族との相互作用や家族の読み解き方や関わり方は、家族療法でのアプローチと同様であったり、学ぶところも多いと思われる。

本調査は、半構造的面接法による家族とDさんも含めた筆者との話し合いからなるものであったが、基本的には家族療法の面接と同様の反応をしながら、ジョイニングに努めた。ジョイニングは、家族システムに溶け込んで円滑なコミュニケーションを試みる始めのプロセスであり、語りやすい文脈を作って関係性を樹立するための方法である。同時に、その時点から家族の全体像を把握し、家族についての「仮説」を形成しつつ家族の語りをうかがっていく家族アセスメントのプロセスでもある。

インタビュー項目としては、次の2つの質問が基本であった。

- 「Aさんが怪我をされて、皆さん大変な経験をされましたが、今はご家族で家も新築されて一段落かと思われます。その大変な過程をどのように皆さんで乗り越えてこられましたか？」
- 「乗り越えることができたご家族の決め手は何だったと思われますか？」

本調査においては最大限介入的になることは避けたが、家族での語りや質問を通して、少なくとも家族が意気消沈したり、悪い状態になったりしないように、リフレーミングと言われる肯定的言い換えを多用したり、肯定的な語りになるような配慮を行った。

また、テーマが「家族の危機と回復」の手がかりとなる「家族レジリエンス」で、参加者は「『危機を乗り越えた』家族」という前提であり、調査が参加者に肯定的な変化を語って頂くという介入、治療的機能を持つとも言え、「ご自分たちの達成やご家族の持つ力に気づいて頂くことが主旨なので、お話して頂くことでいやな影響がでないようにしたいと思います」と調査の意図を説明し、介入的になる場合もありうることを一応の前提とした。

（3）記録と倫理的配慮

関西福祉科学大学研究倫理綱領に則って、調査に先立って、録音の同意を得、匿名性と守秘義務の確保と結果のフィードバックを約束した同意書を交わした。また、調査の影響が何らかの形であったときには、Dさん経由で筆者がフォローできる形を作った。さらに学会発表や論文として個人を特定できない形での公開についての許可も口頭で頂いている。

（4）調査経過と問題意識

聞き取り調査は（X＋1）年12月から（X＋8）年3月まで7年間にわたって3回行われた。X年8月にAさんは業務中の事故により高次脳機能障害を受障し、半年後に自宅をバリアフリーに新築して地域生活を始めた。

聞き取り調査の初回は地域移行後9ヶ月で、労災受給、福祉サービスを活用して安定した生活を送っていた。Aさんは未だに施設入所か地域での在宅生活かに悩みながら、生きるか死ぬかの葛藤も抱えながら、ほぼ全面的に家族のケアによって在宅の生活を続けていた。家族も事故にショックを受けながら、ゆっくり考えたり、家族全員で話しあう間もなく、母子の二人三脚で、退院、家の新築、地域生活に順応してきており、その達成感が多く語られた。

4年後の2回目の面接では、地域生活にも慣れ、Bさんは昼夜をわかたず夫のケアに専心する日々を淡々と過ごしていた。未だ在宅か施設かで悩むAさんの

葛藤は一笑に付され、C さんは常時介護を献身的に手伝いながら大学卒業を迎え、新たなキャリア形成に向かう大きな変化の時期を迎え、毎日を多忙ながらもエンジョイしていた。

3 年後の 3 回目の面接では、余り変化もなく安定した暮らしだと語られたが、その 1 年前に A さんは自殺を試みていた。A さんは「家族に迷惑をかけたくない」ために自殺を試み、「家族に迷惑をかけたくない」ために思い留まったものであった。その出来事は、封印され、無効化されているように極めてさらっと語られ、むしろ、その後 B さんのストレス軽減のために、ショートステイなどの福祉サービスを活用しつつ地域生活が淡々、粛々と送られていることや現在の B さんの「幸福感」が多く語られた。C さんは仕事で抜擢され、ますます忙しい中、具体的に結婚を前提の交際を始めていた。既に A さんの介護も手伝ってくれる現在の結婚相手を両親は歓迎し、結婚に積極的であった。

A 家においては、毎回家族の達成や幸福感が多く語られ、まさしく「家族の危機と回復」というテーマ通りの回復へのプロセスが語られた。家族の会話は雄弁で直截的であり、例えば、妻は夫に対して「愛しい」、「可哀想」と言いつつ、「死にたい」との訴えには、「死にたい人が少々咳が出たくらいで大騒ぎするわけがない」とか「そんなに死にたいならイラク（戦場）に行ったらいい」と返すようにストレートであったが、そのやりとりに特段の葛藤状況は見受けられなかった。しかしながら、筆者は語られること（コンテンツ）とその語りのスタイル（コンテクスト）に違和感を感じた。このセラピストとして感じたのかもしれないある種の違和感とは、セラピストの予測するものとやりとりから立ち上る家族の現象とのズレである。聞き取り調査での家族との会話にあっても、筆者は、セラピー同様、やりとりのフィードバックループを重要な情報として受け止めるが、A 家においては、家族に働きかける際の手がかりから観察、類推されることと、語られることが異なっているような印象を受けた。それは単に、外部の人間に対して建前的、あるいはパフォーマンス的なやりとりをしているということに留まらない家族の役割と役割遂行、更に力関係の変化に伴う家族の課題の未消化や混乱を反映しており、家族危機においてどのような力動が働いて事なきをえるのかについてのより詳細な家族システムの変容を知る事が重要であり、その理解のためにも分析を深める手段が必要であると感じた。

2. 研究方法の選択

（1）分析方法

本調査のデータは「面接における家族とのやりとりを通しての調査者の経験」であり、それらは、調査の録音テープとその逐語録と筆者が感じたことを記述したフィールドノートからなっている。本調査では、家族のプロセスをたどりながら、まず、分析 1 として家族の変化を家族構造図（family map　家族マップ）と言われる図で可視化し、家族システムの構造、とりわけ、パワー、境界、連携などの点に注目して家族の変化について述べた。次に分析 2 として、それら家族システムの有り様はコミュニケーションに反映されると考えて、スクリプトのコミュニケーションの分析をすることとした。

（2）分析方法 1　家族療法での家族をみる家族アセスメントのてがかり

筆者は家族療法のやりとりの中で情報収集をし、仮説を立て、働きかけていき、そのフィードバックループの中で何らかの変化が起こるという繰り返しに立ち会っている。システムの 3 つの要素は構造、機能、発達だと言われ、家族療法の始祖の一人とも言え、構造派と言われる切り口から家族にアプローチしたミニューチン（Minuchin, S. 1974）[6]は、家族システムの構造の変化を見るときの重要なてがかりとして、役割、勢力（パワー）、境界、連携などを挙げた。家族は常ならぬ困難にあって変化を余儀なくされたとき、主導権争いや役割の変化を経て揺らぎ、そして安定する。安定は家族の安寧をもたらし、家族の次なる挑戦へと発展する。その変化の手がかりとして、方略としてのコミュニケーション理解は必須である。つまり家族員はコミュニケーションを使って家族システムを統御し、家族システムはコミュニケーションによって家族員を統御するという相互作用である。家族の普通ではない困難は、家族の変化をもたらし、家族が安定することで家族の安寧な状態が生じるのだが、それは家族の次なる挑戦の呼び水となり、役割、機能の変化などを伴って、家族システムとしての発達を達成し、例えば家

族ライフサイクル上の所謂適応を果たす。本分析では、そうした家族関係の全体の変化を可視化すべく、まず家族マップを描き、解読しようとしたものである（図 1）。

（3）分析方法２　混合研究法（Mixed Methods Research）の変換型混合デザイン（conversion mixed design）からのデータの定量化（quantitizing）の試み

①　分析の意図

家族の多声性、システム論的な動く平衡などを表すのは只でさえ困難であり、定量的に実証するのは不可能に近い。我われ人間の現実生活は、語りうるものと語りえないもの、実証できるものと実証しきれないものがないまぜになっており、それら全体としての人間や状況を把握して初めて、人や現象、実体〈entity〉に迫りうる。Cresswell & Clark（＝2010 : 5）[7]は従来より一般的になされていた量的研究と質的研究の統合を整理し、量的・質的アプローチのどちらか一方だけを用いるよりも共に用いた方が一層の研究課題の理解を生むという前提で、「『哲学的仮定と探求の研究手法をもった』調査研究デザインである」「混合研究法（Mixed Methods Research）」を唱えた。そもそも認識論の異なる質的調査と量的調査を混在させることへの批判もあり、この Cresswell らの動きを Denzin ら（＝2006 ; 28）[8]はポストモダンの流れに位置付けている。筆者は、ローカルな「語り」においても科学的妥当性を担保することは重要であると考え、本研究において、混合研究法の中でも質的研究中心のアプローチの一つであるとされる変換型混合デザイン（conversion mixed design）により、質的データを量的データに変換する「データの定量化（quantitizing）」を試みることとした。これは質的データであるテキストデータを、数量化し、その結果を元のテキストデータと照合し比較・検討することで、テキストデータを深く理解することを目指すものである（クレスウェルとクラブトリー　2016 : 29）本研究では、既述のように家族アセスメントとも言える家族に関する仮説も質的データとし、家族療法で一般的なアセスメントの指標に基づき、分析し、仮説を立て、そのコミュニケーションのパターンを統計処理することにより、そのデータの信頼性を高めたり、質的研究データとその統計的処理の課題を探るものである。

②　リサーチクエッション

筆者が感じた A 家における会話の不自然さは問題というよりは、危機にあってその相互作用が変化し、それを安定させようとする揺らぎ上に起こる当然のプロセスではないかと仮定され、家族システムの構造と、方略としての家族のコミュニケーションという二つの視点で読み解きうると考えられる。家族システムの構造については、前掲の Minuchin の臨床的手がかりに基づき、それに応じたコミュニケーション理解の基盤としては、コミュニケーション学派（MRI Mental Research Institute）の「コミュニケーションの仮説的 5 つの公理」（Watzlawick, et.al. 1967 : 48-71）[9]に依拠する。即ち、会話には内容を語る会話（contents コンテンツ）と関係を語る会話（context コンテクスト）があり、人びとがやりとりしているのはコンテンツを借りたコンテクストであり、人びとのコミュニケーションは相補関係と相称関係のいずれかであるが、それらによって人びとは会話においてパワーストラグル（power struggle、勢力争い）をしているなどの視点である。家族のコミュニケーションを権力（パワー）の奪い合いという点に着目して短期戦略派と言われる家族療法の一つの方法論を編み出して実践した Hayly, J.（1976）[10]は、家族の階層において地位が混乱したり明確でない場合、観察者からみると「勢力争い」とでも呼べるような争いが起きたり、境界を越えて連合が起こったりし、しかもそれが秘密に行われると、その組織は問題をはらむと述べている。「すべてのコミュニケーション活動は、相手との関係の性質を規定する営み」（＝1986）[11]なのである。特に家族や夫婦のように長期にわたって親密な関係を継続する者の間では、「誰が何をするのか」との問いは重要であり、すべての症状は関係の主導権を握るための戦略である（佐藤 2003 : 160）[12]。パワーストラグルの戦略の一つとして Haley はディスクオリファイ（disqualify 脱文脈化）するコミュニケーションをあげている。また、長谷川らは家族療法の基盤をなすベイトソン（Bateson, G.）らのコミュニケーションの知見をもとに言語は「聞き手の行動を『拘束』するものである」（1998 : 13）[13]という前提で、会話のマネジメント（やりくり）面に注目している。

そこで分析 2 の仮説として「家族構造の変化は、家

族システムの変化を反映し、その家族システムの変化のてがかりは『権力（パワー）』・『連携』・『境界』であり、家族のコミュニケーションは、家族関係の役割やパワーの変化を表し、変化は家族間の関係を再規定する営みである。それが会話のマネジメントに現れる。そうした一連の家族システムの変容が円滑に行われるように働く家族の所与の能力が家族レジリエンスである」とした。また、「家族ケアには個人の境界を侵すような権力関係、あるいは依存関係が生じがちである。それは境界の曖昧性や侵襲性を伴い、語りの主語や主体が曖昧なコミュニケーションを生じがちであると言う面がある」という点にも注目した。

これらにより、家族の変化をパワーと脱文脈化、それに伴う会話のマネジメントをキー概念として、調査の内容を精査し、調査のスクリプトを分析することとした[14)]。聞き取り調査での会話を逐語録に起こし、以下の先行研究による指標を設定し、コーディングした。コーディングのてがかりは、家族の葛藤場面における「脱文脈化」（disqualification）については Bateson, G. を代表とする MRI、家族構造については Minuchin（1974）[15)]、実際の会話のマネジメントについては長谷川（1998）、山田富秋（2004）[15)]などに基づいた。

パワーについての脱文脈化の会話とは、例えば「何かを言うことで何も言わないこと、何も言わないことで何かを言うこと」（Watzlawick & Jacson, 1967）であり、Haley（1976）は、以下の４つの要素を揚げている。①メッセージの送り手を混乱させる。②受け手がメッセージの中身を混乱させる。③メッセージの受け手を混乱させる。④文脈を混乱させる。Wichstrom（1993）[16)]らによれば、ディスクオリファイするコミュニケーションとは、A の発話が自分の知覚、思考、感情の表出を正確に受け取られないことを明示的あるいは暗示的に示す個人 B からのコミュニケーションを意味し、能動的にはその発話を無意味なもの（undermining）にしたり、再定義（redefining）したりすることであるとしている。Minuchin（1978＝1987）[17)]も脱文脈コミュニケーションの８つの特徴を挙げているが、いずれも誰が誰に対しているものなのかや、肯定なのか否定なのかを曖昧にすることによって会話の意味や流れを逸脱させ、無効化させるような反応であるとしている。

そこで、まず作業仮説❶として、「家族各員の発話数の変化は、パワーを反映する」とし、各自の発話数の多寡とその 1-3 回の変化を見た。

更に作業仮説❷として、「会話のマネジメントにおいて、脱文脈化の会話が多ければ、家族は変化の途上にあって揺らぎの中にある」とした。会話分析においては、会話参加者の規範があり、例えば、会話の順番取りとして、他者選択、自己選択、自己継続（山田 2004）などが挙げられるが、会話を続けるには、相互作用としてそれぞれが会話をコントロールし、会話者の相互作用によるマネジメントが行われる（長谷川 1998）。山田も関係操作のために混乱したコミュニケーション、つまり会話の規範に従わないコミュニケーションが見られると述べている。そうしたルールは相補的関係性に則るものであり、パワーストラグルを行っている葛藤関係にあれば、むしろ相称的関係性にもちこむために、例えば脱文脈化などの方略が用いられる。その関係性、あるいは求められている役割に変化を求めれば、割り込み、オーバーラップ、沈黙（ポーズ）などによってそれらのルールから逸脱を試みるものなのである。Kantor & Lehr（＝1990 : 345-350）[18)]は、家族システムに言及して、それぞれの個人は、その人自身のニーズと矛盾しないような、そして最適な状態としては家族という組織の目標と矛盾しないような仕方で、家族によってそのひとのパーソナリティーが確認されうるような家族システムにおける位置を探し求め、交渉しており、家族の構成員は、①始動者 ②追従者　③反対者　④傍観者の４つの役割をとるとしている。それぞれ始動者に対して「追従すること」「反対すること」「傍観すること」の３つの反応のパターンをとって会話をつなぐこととなる。その役割をあきらかにするのは、①その順番、順序　②その状況、文脈　③柔軟性の程度　④組み合わせ　⑤意味やイメージ　⑥個別のシステム戦略　⑦接近領域　⑧達成目標であり、４つの役割演技者モデルの４つの継起の組み合わせ、即ち①成功している継起　②不成功な継起 ③傍観者を無能にする戦略の症候　④傍観者を資格剥奪にする戦略の症候などであるとしている。これらから会話をマネジメントするために４つの受け方があると考え、その指標を以下のように設定した。

ｉ）（P）「肯定的」な受け方：受容的な順番・ルール通りのもの。追従者役割をとる。相補的コミュニケー

ション。

ⅱ）（N）「否定的」な受け方：無効化してパワーの獲得を目指す。反対者役割をとる。相称的コミュニケーション。

ⅲ）（C）「転換的」な受け方：ターンテイキングによりパワーの獲得を目指す。始動者、つまりリーダー役割を目指す相称的コミュニケーション。

ⅳ）（B）「バランス」をとる受け方：逸脱を避けたり、システムの安定を目指す。追従者、あるいは傍観者役割で、相補的コミュニケーション。

作業仮説❸を、「語り手と語られる主体の個別性と侵襲性は家族構造のパワーと境界に反映する」として、他者侵襲性・境界の曖昧性を、自分について自分が述べている「I-Ⅰメッセージ」、自分が他者について語る「他者語り」、他者が自分について語る「他者による語られ」をその指標とした。

【分析の結果】

1．分析方法１　家族療法での家族をみる家族アセスメントのてがかり

本分析では、家族アセスメントで見られるパワーストラグル、構造や機能の変化に注目した。カンターの家族役割についての言及（＝1990）に基づいて、パワーの持ち様と、「リーダー（始動者）」「追従者」「反抗者」「傍観者」役割の遂行に着目して、家族の役割の変化を追ってそれらを家族マップ❶-❺（図１「A 家の家族マップの変化」）に表した。

［#1 X＋1 年 12 月の聞き取り調査］

具体的な事実以外に語られた多くは、受障時の B さんのショックとその時期を乗り切る C さんの活躍振りと、両親揃っての子どもの頃からの C さん自慢などであった。家族の話からは、家族マップ❶「A さんの受障前」は「A さん＝リーダー、B さん＝追従者、C さん＝追従者」であったが、家族マップ❷「受障直後の家族マップ」では、「A さん＝パワレスなリーダー、B さん＝追従者、C さん＝パワーのあるリーダー」であることがうかがわれた。家族マップ❸に見られる「第１回目の聞き取り調査：受障２年後の地域移行後」での家族構造は、「A さん＝パワレスなリーダー、B さん＝パワーのあるリーダー、C さん＝パワーのあるリーダー」となり、3 者がそれぞれパワーを持ち拮抗していることが緊張感を孕むコミュニケーションとして観察された。役割が混乱し、C さんが父親代わりを担っていたが、A さんにとっては、パワレスな庇護される家族員の役割が受け止め難く、B さんにしても自分が「可愛い」だけの妻であって C さんに依存してなんとかやり過ごしてきたというストーリーからは逃れがたいものがあるようであった。しかしながら、筆者は社交的で多弁な妻の有能感に圧倒され、A さんの BGM のように繰り返される辛さの訴え、それを笑いの種にする家族の弾けるような明るさに違和感を感じていた。

［#2 X 年＋5 年 12 月］

次の家族マップ❹「2 回目の聞き取り調査：地域移行後の不安を孕みながらの安定期」の受障 5 年後では、「A さん＝パワーを持った反抗者、B さん＝パワーのある追従者　C さん＝（隠れ）リーダー」となり、表向きにはリーダーがいない状態で、安定していないように見受けられた。C さんのバランスをとるような発言が目立ち、C さんは B さんとの密着関係と A さんとの隠れ連合関係を持ち、未だに在宅か施設で悩む A さんの葛藤とそれを一笑に付す B さんのパワーアップが窺われた。B さんは変わらず「何もできない健気な可愛い妻」だった。多忙で充実した大学生活を送っていた C さんは、父親の介護にも積極的で、リーダーシップをとって母親の「夫」役割を十分に果たしていた。A さんと C さんの親子の密接な関係性は変わらず、三者の葛藤状況も表面的には余り見受けられなかった。

［#3 X＋8 年 3 月］

さらに家族マップ❺「3 回目の聞き取り調査：C さんの離巣を控えての安定期」の受障 8 年後には、「A さん＝パワレスな傍観者　B さん＝パワーのあるリーダー　C さん＝（隠れ）追従者あるいは傍観者」となり、それぞれのパワーが拮抗していた状態から役割や関係性が定まり、3 回目に漸く落ち着いたものと思われた。A さんの自殺企図後は B さんの負担が少しでも軽減するようにショートステイを積極的に利用するようになった。しかしながら、福祉サービスの質の悪さを補う B さんの細やかなケアが優れているという

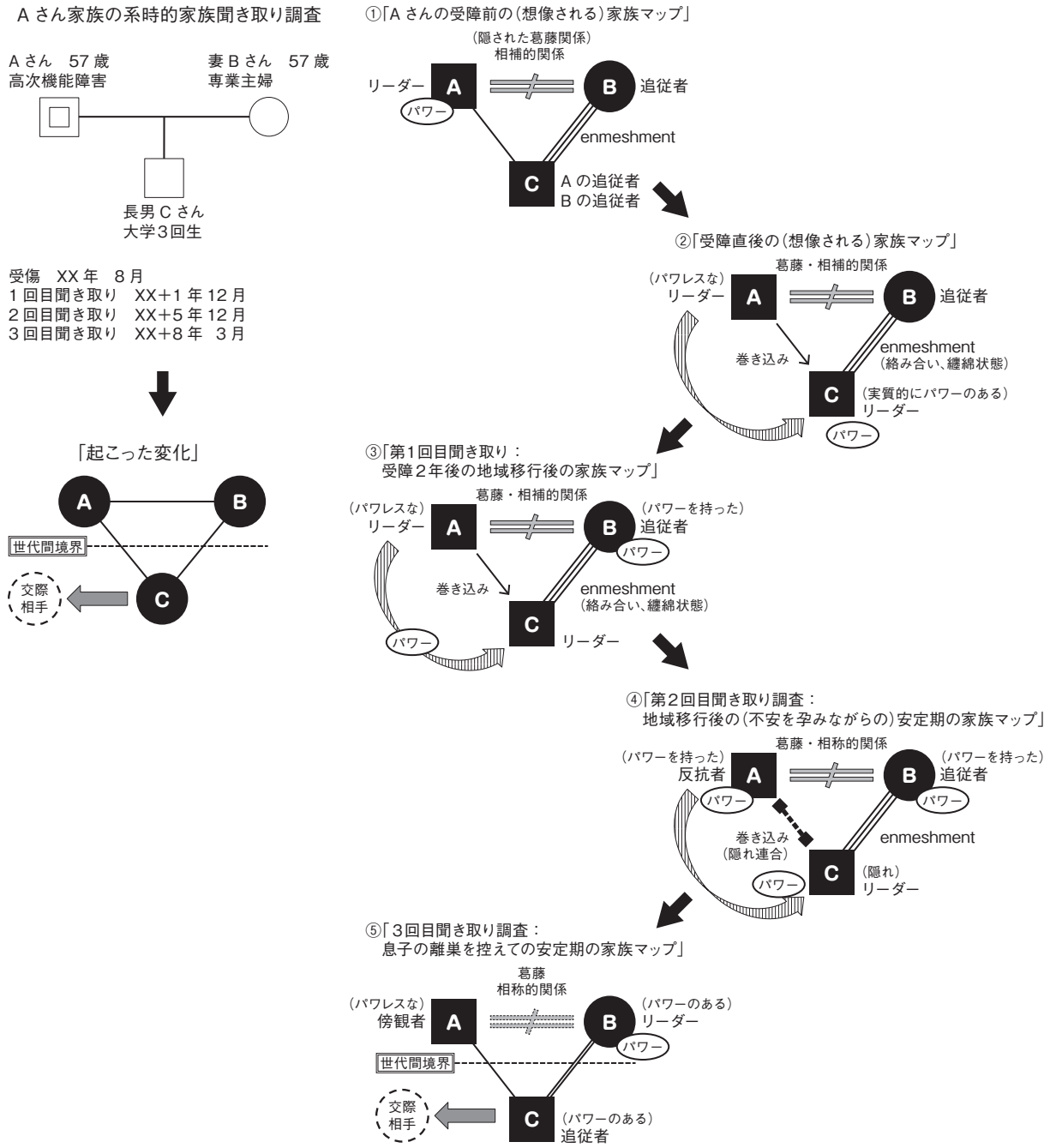

図 1　「A さん家族の家族マップの変化」

ことで、A さんは訪問介護以外に殆ど施設等の利用もせず、リハビリ仲間との交際も絶えていた。B さんの懸命の介護が A さんを非社交的にし、社会生活を阻んでいるようだった。いずれにせよ一家はそれなりに福祉サービスを活用しつつ、社会保障に支えられて、粛々と地域の暮らしを送っており、現在の B さんの「幸福感」が語られた。B さんが表立ってもリーダーシップをとるようになり、夫婦の力関係の葛藤は減じているようだった。相次ぐ入院や手術など症状の悪化などに伴う A さんのパワーダウンが顕著でもあったが、A さんはたどたどしく弱々しい語りながら、辛い症状を訴え、B さんのジャブのように降り注ぐ、場合によっては否定的な言葉にもしっかり応戦していた。主たる医療機関が変わることで、ケアマネージャーや利用施設も代わり、継続的な専門職の相談相手はおらず、随時家族がそれらの資源を主体的に選んでいた。子どもの頃から一人息子を溺愛とも言いうるような密着関係にあった母親は、真意を測りかねる程、再三 C さんに早く結婚して一家をなすように説いていた。

そのプロセスにおける役割とパワーの変化は、3 回目まででは、A さんにしても B さんにしても表立っ

ては受け入れがたいものであり、両親の葛藤を露わにするダイアローグをCさんがとりもってバランスを保とうとするようなパターンが多く見受けられた。3回目にはBさんが自らを家長的存在であるということを明らかに受け入れ、名実ともにBさんがリーダーとなり、そこで言語的に語られるコンテンツと会話の流れで文脈的にやりとりされるコンテクストの齟齬が減じ、家族が家族ライフサイクル上の変化とも相まって安定したものと考えられる。

以上の分析は、結果のデータ入力に協力した研究者とのメンバーチェッキングを経て、Dさんのフィードバックを受けている。

2. 分析方法２　混合研究法の変換型混合デザインからのデータの定量化の試み

(1) 全体の発話数（作業仮説❶）（表１「各自の発話数とその変化」）

3回の面接における3者の発話数の差を有意検定した結果、$\chi^2=65.37$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.01）。AさんとBさんでは、1回目、2回目、3回目と回を追うごとに発話数は増加していた。Cさんは1回目から2回目では発話数は10倍に増加したが、3回目では2回目に比べて半減していた。とりわけBさんの発語数が他の2者よりも圧倒的に多く、Bさんが基本的に最もパワーを持っていることを示していると考えられた。しかしながら、Aさんの語りが、発語が不自由な中での語りであることを考えると、筆者がAさんの語りを待つことが多かったとはいえ、Aさんは十分に語ったと言えよう。

表１「各自の発話数とその変化」

	1回目		2回目		3回目		計
発話数	各自％	発話数	各自％		発話数	各自％	
Aさん	80	37.2	209	23.0	244	26.6	533
Bさん	112	52.1	425	46.7	508	55.3	1,045
Cさん	23	10.7	276	30.3	167	18.2	466
計	215	100	910	100	919	100	2,044

(2) 会話のマネジメントと脱文脈化コミュニケーション（作業仮説❷）（表２「発話数と会話のマネジメント機能」）

3回の面接における3者の会話のマネジメント機能に関して、「肯定的（P）」、「否定的（N）」、「転換（C）」、「バランス（B）」の4つの指標の発言頻度の差を有意検定した結果は以下の通りであった。

① 「肯定的」に関しては、$\chi^2=50.294$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.01）。発話数と同様に、AさんとBさんでは、1回目、2回目、3回目と回を追うごとに「肯定的」発話数は増加していたが、Cさんも1回目から2回目では「肯定的」発話数は10倍に増加したものの3回目は2回目に比べて半減していた。

② 「否定的」に関しては、$\chi^2=22.014$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.01）。AさんとBさんでは、1回目、2回目、3回目と回を追うごとに「否定的」発話数は増加していたが、Cさんは1回目から2回目では「否定的」発話数は増加したが、3回目では2回目に比べて減少していた。「肯定的」も「否定的」も同じパターンであったが、肯定的な受けが圧倒的に多く、基本的なコミュニケーションは円滑であることは窺えたと考えられる。しかしながら、そもそもの初回調査において、筆者がまず「家族レジリエンス」について説明し、その意を汲むようにBさんが家族の達成等肯定的なことを語り、Aさんがそれを否定するというパターンが繰り返されていた。それ以外の内容でもAさんはBさんに対して否定で受けることが多かった。Aさんは2回目から減じたものの、Bさんと比較しても否定的な受け方が多かった。AさんがBさんを肯定的に受ける話題は子ども自慢と自らの身体的な辛さだけのようであった。ここに家長として君臨していた夫が生活全般にわたって妻のケアを受けねばならなくなったことへのやり切れなさが見えるようであった。

③ 「転換」に関しては、$\chi^2=10.555$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.05）が出現度は低かった。Aさんは、1回目と2回目では1～2回であったが、3回目では12回と回数が増加していた。その少ない中で2回目はBさん、3回目はCさんが圧倒的に多かったことから力関係の変化が明確に示されたと考えられた。

④ 「バランス」に関しては、$\chi^2=7.237$（df＝4）で、有意差が見られなかった。毎回少ないながら変化しており、とりわけCさんに顕著であったことからCさんが両親の間を取り持ってバランサーをしていたことが窺われた。

受障後の期間が長くなるにつれ、パワーストラグル

表 2 「発話数と会話のマネジメント機能」

		P(肯定的)	N(否定的)	T(転換)	B(バランスをとる)	個別発話数	%	/全会話数
A さん	1 回目	53(66.3)	25(31.2)	1(1.3)	1(1.3)	80	37.2	215
	2 回目	175(83.7)	31(14.8)	2(1.0)	1(0.5)	209	23.0	910
	3 回目	195(79.9)	34(14.0)	12(4.9)	3(1.2)	244	26.6	919
B さん	1 回目	100(89.2)	9(8.0)	1(1.0)	2(1.8)	112	52.1	215
	2 回目	371(87.3)	42(9.9)	11(2.6)	1(0.2)	425	46.7	910
	3 回目	451(88.8)	50(9.8)	6(1.2)	1(0.2)	508	55.3	919
C さん	1 回目	20(87.0)	1(4.3)	1(4.3)	1(4.3)	23	10.7	215
	2 回目	237(85.9)	25(9.1)	3(1.1)	11(4.0)	276	30.3	910
	3 回目	139(83.2)	20(12.0)	1(0.6)	7(4.2)	167	18.2	919

（かっこ）内は各自の発話数の中での P・N・B・C のパーセンテージ

表 3 「I-I メッセージ」

	1 回目			2 回目			3 回目		
	該当数	%	/各発話数	該当数	%	/各発話数	該当数	%	/各発話数
A さん	57	70.4	80	178	85.2	209	210	86.1	244
B さん	56	50.0	112	187	44.0	425	253	49.8	508
C さん	22	95.6	23	156	56.5	276	108	61,7	167
計	135		215	521		910	571		919

表 4 「他者語り」

	A さんの他者語り	%	/各発話数	B さんの他者語り	%	/各発話数	C さんの他者語り	%	/各発話数
1 回目	24	30.0%	80	57	50.9	112	3	13.0	23
2 回目	32	15.3%	209	234	55.1	425	119	43.1	276
3 回目	27	11.1%	244	240	40.1	508	50	32.9	167
	83	15.6	533	531	50.8	1045	172	36.90	466

表 5 「他者による語られ」

	1 回目			2 回目			3 回目		
	語られ数	%/語られ総数（81）	%/全発話数（215）	語られ数	%/語られ総数（361）	%/全発話数（910）	語られ数	%/語られ総数（292）	%/全発話数（919）
A さん	40	49.3%	18.6%	203	56.2%	22.3%	190	65.1%	20.7%
B さん	8	9.9%	3.7%	72	19.9%	7.9%	24	8.2%	2.6%
C さん	33	40.7%	15.3%	86	23.8%	9.5%	78	26.7%	8.5%
計	81		37.7%	361		40.7%	292		31.8%

を想定させる否定的な受け方が相対的に減じ、3 回目には家族全員が総じて肯定的な受けをするようになり、家族の葛藤状況が緩和したとも見えた。「脱文脈化」を意味する順番破りの転換、有意差が見られなかったバランスとりの会話はもともと多くなく、変化もあまり見えなかったが、総体的に C さんの発話は減り、これらから C さんが一度引き受けたリーダー役割から傍観者的な立ち位置に変化しつつあるように思われた。

これらの変化から、総体的に相称的コミュニケーションから相補的コミュニケーションへの変化が見え、家族は一旦落ち着きを見せているのが数値的にも見えたと考えられた。

（3）語り手と語られる主体（作業仮説❸）（表 3「I-I メッセージ」、表 4「他者語り」、表 5「他者による語られ数」）

3 回の面接における 3 者の「I-I メッセージ」数を有意検定した結果、$\chi^2 = 24.226$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.01）。1 回目と較べて 2 回目では 3 者と

もに「I-I メッセージ」の数は増加した。3 回目では A さんと B さんは共に「I-I メッセージ」の数は増加したが、C さんの数は減少した。しかし、1 回目と較べれば多かった。

3 回の面接における 3 者の「他者語り」数を有意検定した結果、$\chi^2=67.253$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.01）。1 回目では 3 者の中で C さんの「他者語り数」は少なかったが、2 回目では 3 者共に「他者語り数」が増加した。3 回目では、B さんの「他者語り数」は多いままだったが、C さんの「他者語り数」は減少した。A さんは 3 回を通じて大きな変化はなく、総じて B さんの「他者語り数」が多かった。

3 回の面接における 3 者の「他者による語られ」数を有意検定した結果、$\chi^2=27.467$（df＝4）で有意差が見られた（P＜.01）。1 回目では A さんと C さんが「語られ数」が多かった。2 回目では 3 者ともに「語られ数」は増加したが、中でも A さんが多かった。3 回目では、3 者の中で B さんの「語られ数」が減少していた。

圧倒的に語られたのは A さんであり、他者を語るのは B さんであった。B さんは自分の献身について饒舌に語ったという印象があったが、B さん自身の「I-I メッセージ」は少なめであった。A さんの「I-I メッセージ」は増え、C さんの「I-I メッセージ」が減り、「他者語り」は、B さんが 2 回目・3 回目は多く、C さんの「他者による語られ」も増加した。C さんが他者について最も語っていたのは、2 回目の家長役割の時期であった。C さんは初回の語られる対象から語る主体へと変化し、離巣を示唆しているとも考えられた。全体的に、他者へ言及する会話が減じ、これは「語り手と語られる主体の個別性と侵襲性は家族構造のパワーと境界に反映する」とした作業仮説❸を裏付けているのではないかと想定された。

総体的に 2 回目で変化が起こり、3 回目でそれが若干元通りになる項目が多く、2 回目がまだ変化の時であり、3 回目でその変化が安定したものとなったことを示唆していると考えられ、作業仮説❷の「会話のマネジメントにおいて、脱文脈化の会話が多ければ、家族は変化の途上にあって揺らぎの中にある」は立証されたと考えられた。また作業仮説❶の「家族各員の発話数の変化は、パワーを反映する」も成立したと思われた。

【考察】

家族システムの変化の途上では、調整のために葛藤や不協和音が生じ、そのため脱文脈化と言われる不自然なコミュニケーションが見られるのではないかという仮説は、本分析において立証されたと考えられるが、転換（ターンテーキング）やバランスとりの会話数そのものが少なく、必ずしも立証されたとは言い難いかもしれない。また、脱文脈化がいわゆる病理的なコミュニケーションに関わるものであることからも、A さんの家族の会話が多少不自然な部分があっても、一般的な閾値の枠内であったと言えよう。同時に、回毎に上下に変化するということは、正しくシステムが「揺らぎ」ながら安定しているプロセスを表していると考えられた。また A 家のコミュニケーションへの違和感を感じたことについては、聞き手が必要以上にアナログな情報に敏感であることを示しているとも言え、絶えずアセスメントを繰り返すセラピスト的な感覚のゆえであれば、より精緻に家族のコミュニケーションを読み解く分析方法の工夫が必要であることが示唆されている。

しかしながら、発話数や会話の機能などについての結果から、パワーの変化が生じ、リーダー役割、ひいては家族役割の変化を産み、それが、家族システムの変化に伴って、「権力（パワー）」、「提携」、「境界」の変化が起こること、つまり C さんを巡る微妙な三角関係から、C さんの離巣を控えて C さんとの連合から夫婦連合へと提携関係の変化が生じ、それに伴って世代間境界も明確になったこと、そうした役割が定まったことから、聞き手にとっては不自然と思われるコミュニケーションが減じたのではないかという可能性の一端を示せたのではないかと思われる。

また、受障後の期間が長くなるにつれ、パワーストラグルを想定させる脱文脈的な会話が減じて、コンテンツ志向の会話が増加した。これらのことから、家族が混乱から安定に向かうにつれて関係よりも内容を語るシンプルな会話となり、変化にあって家族システムの「勢力－連携－境界」が変化し、そのプロセスは揺らぐが、新たなシステムが形成されれば再び安定すること、家族の不自然と感じられるようなコミュニケーションは、家族システムの変化の途上に見られる、当

然の揺らぎであることが明らかにされ、これは正しく家族レジリエンスが機能していることを示していると考えられた。さらに、家族ケアにおいて危惧される権力関係、あるいは依存関係については、A さんを巡るパワーストラグルに決着がつき、役割が固定化されたことで落ち着いたようにも思われた。しかしながら、その決着が、A 家が閉ざされがちであるだけに、家長として「強者」であった A さんが、他者からのケアが不可欠な「弱者」となったことを示しているならば、外部からの何らかの刺激やフィードバックが必要となる。例えば、介護に関わる多職種の人々や地域での見守りの重要性である。また、「子ども」が離巣するに当たって、子どもへの「ケア」に伴う侵襲的関係にはピリオドが打たれると考えられるわけだが、その準備に向かっていることも示唆された。これらから家族療法の知見やスキルは家族の全体を把握する大きなてがかりであることも示せたのではないかと考える。

【まとめと今後の課題】

A 家は、未曾有の困難を乗り越え、その後の長い道のりを一致団結して、現在は妻が「幸せ」だと語るほどに安寧な暮らしを送っている。その間に長男は学業を終え、職業を持ち、程なく配偶者も得ようとして自分なりの人生を進んでいる。ここに至るまでには、家族が変化し、何とか安定し、その家族の安定が次の挑戦の呼び水となり、日々生成変化していく家族システムの自己組織性を示す A 家は実に強靭（レジリエント）である。A 家には危機的状況や時間の経過につれて、家族関係の役割や力関係、すなわち家族構造が変化し、それを反映して家族のコミュニケーションが変化し、家族間の関係が再規定されるという循環が見られる。それらは家族の会話のマネジメントに現れるわけだが、そうした一連の家族システムの変容が円滑に行われるように働く家族の所与の能力が家族レジリエンスである。それは、日常的な困難なくらしであっても、一般的な変化を遂げること、つまり危機的状況においては、淡々と日常性を保っているようでありながら、それは力を振るって困難を乗り越えようとする動きであり、それこそがすべての家族が持っている家族レジリエンスなのではないだろうか。ボナーノ（＝Bonanno : 2009）[19]が言うように「逆境の中で強く生きる人間の一般的な能力」としての家族レジリエンスが、A 家の困難な非日常的な日常生活のプロセスの中から浮かび上がってきたと考えられる。

家族は、家族レジリエンスを働かせて、概ねの危機からは回復できる。そこに社会資源がどれほど有効に働いているかは、本研究から浮かびあがってこなかった。ただ、A 家の安定を支える大きな要因は経済的安定であった。また、家族は社会資源を探しまわるよりも、選べる状況にあったわけだが、その中で、A さんが自死を思い詰めるほど殆どの暮らしを妻の介護に負う地域での生活は苦渋に満ちたものなのであるということを認識した上で、今後のサービスやサポートは計画され、さらなる資源の充実を図ること重要であることが改めて論点として浮かび上がってきた。これらも含めて、家族レジリエンス志向実践のプログラムの充実を図っていきたい。

本研究は、臨床の知見からより実証的と言える指標を探索するための一つの試みであったが、調査者との相互作用、アナログな情報をより実証的に捉える手がかり等、捉えるべき今後の課題も多い。まずは、トライアギュレーションのために他の分析も試行しつつ、今後一層の精緻化に努めていきたい。

【付記】

※長年にわたって、ご自宅で長時間の聞き取り調査にご協力くださいました A さんご一家に心からの感謝を捧げます。

※分析とその結果について助言やメンバーチェッキングをしてくださった D さんをはじめとする研究協力者の方に感謝申し上げます。

※本調査は、科学研究費助成事業科学研究費助成事業基盤 C「家族レジリエンスを促進するソーシャルワーカーと家族の会話プログラムの開発的研究」（H 18-20）と「向老期知的障害者家族の安寧な日常生活のためのサポートプログラムの開発的研究」（H 23-25）による。

【註と文献】

1）本稿では、「障害」disability を社会制度に起因する「障害物」としてとらえる「障害学」の立場から「障がい」でなく、「障害」の表記とする。

2）Walsh, Froma.（1996）The Concept of Family Resilience : Crisis and Challenge. *Family Process.* 35(3). 261-81.

3）内閣府（2013）『平成 25 年版障害者白書』http : //www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/zenbun/index-w.html. 20160820.

4）筆者は家族療法の臨床をなしているが、日常の家族支援にあってシステミックな認識論によっており、臨床的な面接技術は調査の場面でも有効であると考えた。また本論において「家族療法」の文脈で語られる場合セラピストやセラピーの語を用いた。

5）クレスウェル、J. W. & クラブトリー、B. F.（2016）「最先端の混合研究法デザイン」日本混合研究法学会監修　抱井尚子　成田慶一編『混合研究法への誘い：質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』遠見書房.

6）Minuchin, Salvador（1974）*Families and Family Therapy.* Harvard Univ. Press.

7）Creswell, J W. & Clark, V. L P.（2007）*Designing and Conduction Mixed Method Research.* Sage Pub, Inc.（＝2010　大谷順子訳『人間科学のための混合研究法：質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房）.

8）Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S.（2000）*Handbook of qualitative research, 2nd ed.* Sage Pub., Inc.（＝2006 平山満義監訳『質的研究ハンドブック 1 巻：質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房.

9）Watzlawick, P., Bavelas, J. & Jackson, D. D.（1967）*Pragmatics of Human Communication : A Study of Interactional Patterns. Pathologies, and Paradoxes.* W. W. Norton & Company, Inc.

10）Haley, Jay（1976）Problem Solving Therapy. Jossey-Bass Inc., Pub.

11）Haley, Jay（1963）Strategies of Psychotherapy. Grune & Stratton（＝1986　高石昇訳『戦略的心理療法：ミルトン・エリクソン心理療法のエッセンス』黎明書房）

12）佐藤悦子（2003）「家族療法」日本家族研究・家族療法学会編『臨床家のための家族療法リソースブック：総説と文献 105』金剛出版

13）長谷川啓三（1998）「コミュニケーションのマネジメント側面について」『家族療法研究』15(3). 金剛出版

14）質的研究における聞き取り調査においては、調査者と対象者との相互作用のプロセスを重要視するものであり、本研究にあっても、調査者の発話も分析に入れるべきであると思われる。しかしながら、調査者が会話の主導権を持ち、緩やかに会話マネジメントの主体として家族の会話が発展していくという形で進んでいく中で、調査者を中心に会話が回ることは避けがたく、本研究では家族の発話のみを分析の対象とした。

15）好井裕明・山田富秋・西坂仰編（2004）『会話分析への招待』世界思想社

16）Wichstrom, L. et al.（1993）"Competence in children at risk for psychopathology predicted from confirmatory and disconfirmatory family communication" *Family Process.* 32(2)：203-220

17）Minuchin, S., Rosman, B.& Baker, L.（1978）*Phychosomatic Families. : Anorexia Nervosa in Context.* President and Fellows of Harvard College.（＝1987　福田俊一監訳『思春期やせ症の家族：心身症の家族療法』星和書店.

18）Kantor, David, & Lehr, William（1975）. *Inside the family.* Jossey-Bass（＝1990　野々山久也訳『家族の内側－家族システム理論入門－』垣内出版.

19）Bonanno, George. A.（2009）*The Other Side of Sadness : What the New Science of Bereavement Tells Us About Life After Loss.* Basic Books